ICT 海外ボランティア会会報
第 109 号

2023 年 7 月 24 日（月）

URL: https://ictov.jimdo.com
EML: info.ictov@network.email.ne.jp

目次

◆特別寄稿
NTT 東日本におけるソフトウェア開発の内製化
当会顧問
NTT 東日本 国際室長　日下　玲央

◆特別寄稿
岩槻日記(24)　当会特別顧問　石井　孝

◆海外グラフィティ
経理あれこれ
日本ﾍﾞﾝﾀﾞｰﾈｯﾄ社長　ｴｯｾｲｽﾄ　田上　智

◆海外便り
やどかり族の中国俳柳紀行序章(4)
元 JICA ｼﾆｱ海外ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ　北垣　勝之

◆メッセージリレー(2)

◆国際交流基金の動き
日本語パートナーズ派遣事業の募集　事務局

◆第 19 回 ICT 海外情報ウェブサロン模様　事務局

特別寄稿

NTT 東日本におけるソフトウェア開発の内製化

当会顧問
NTT 東日本 国際室長
日下　玲央

ICT 海外ボランティア会の皆さま、こんにちは。NTT 東日本の国際室の日下と申します。本欄の過去の記事において、特別顧問の石井様が、企業にとってソフトウェア開発の内製力がいかに重要か繰り返し語って下さっています。この度は、NTT 東日本が遅まきながら取り組んでおります、ベトナムのグループ会社と連携したソフトウェア開発の内製化の取り組みを紹介させて頂きますので、どうぞご笑覧ください。

NTT 東日本は通信事業者として FTTH の普及に取り組んで参りましたが、これからは、その通信インフラの上で、地域のお客様と様々な新たな価値を生み出す、ソーシャルイノベーション企業になりたいと考えております。それは例えば、データドリブンな農業によって、地域が持つアセットの価値を再設計するような試みです。

それを進める上では、お客様のご要望を聞き、スムーズかつ安価に IT でご要望を実現するための内製力は必須ですので、様々な IT 技術を自ら扱うことができるデジタル人材の育成を社内で進めております。一方、IT 技術にも色々ある中で、ソフトウェア開発については、これまで業務システムの開発の多くを他社にアウトソースしてきた経緯もあり、自社に多くのエンジニアを抱えているとはいいがたいのが実情です。

そのため、NTT 東日本では、ソフトウェア開発の内製力強化に向け、NTT 東日本社内の内製化プロジェクトチームの立ち上げと、それに加えて、関連会社であるベトナムの OCG Technology JSC（以下 OCG）でのオフショア開発体制の確立に取り組んで参りました。

OCG は、ベトナムの国営通信キャリア VNPT 社と、NTT 東日本の子会社である NTT イーアジアとの合弁会社として、2016 年にベトナムハノイにて設立されました。現在は、オフショア拠点として、ソフトウェア開発に加え、データ分析や管理指標の見える化などのサービスを提供しております。案件の急拡大に伴い、積極的にエンジニア採用を行っており、現在 100 人近い従業員が在籍しています。日本語でシステム要件ヒアリングが可能な優秀なベトナム人スタッフが多数在籍していることから、日本国内のお客様とスムーズな開発が実施できることが強みの一つです。

ベトナムのオフショアでの開発にはセキュリティ上の懸念を持たれる方もいらっしゃるかもしれませんが、OCG には NTT 東日本と同水準の情報セキュリティ運用体制を確立しました。 認証装置などのハード面の充実だけでなく、 従業員に対する教育も徹底し、日々情報セキュリティリスクの低減に努めています。2023 年 5 月には、ISMS 認証（ISO/ IEC 27001 ）を取得しましたので、 安心して開発や ITO（Information Technology Outsourcing）をできる環境にあります。

OCG 社の 2023 年旧正月パーティーの様子

また、NTT 東日本は、ソフトウェア開発手段として、ローコードのマーケットリーダーである OutSystems に着目してきました。NTT 東日本の社員がソフトウェア開発の上流工程を実施しつつ、OCG のエンジニアが OutSystems を使った開発を実施することにより、開発スピードの向上とコスト削減を実現できました。

ローコード開発プラットフォームでは、あらかじめ用意された部品を組み合わせる手法で、機能設計の段階から GUI による視覚的な操作で開発を進めることができます。コーディング作業が減り、テスト工程を削減できるため、開発期間を大幅に削減しつつ品質も高くなるというメリットが証明されています。

OCG×OutSystems の取り組みは、まず NTT 東日本の業務システム開発から始めましたが、専門性の高い複雑な業務や、多数の他システムとの API（Application Programming Interface）連携という要件に対しても、柔軟かつスピーディーに開発することができました。開発過程において、OCG のエンジニアが来日し、システム利用者と顔を合わせた集中議論を行うなど、エンジニアが実業務を深く理解することで、真の目的に沿ってユーザインタフェースを改善し、提案型のシステム構築を行ったことが重要だったと考えております。

現在までに、通信設備の在庫管理システム、緊急情報連絡システム、調達 RFP（Request For Proposal）管理システムなどをリリースしておりますが、手前味噌ながら、利用者からは、これまでのシステム開発よりも、 安価かつ短期に実現でき、 驚くほど品質も高いとの声を頂いています。

また、OCG ではデータ集計・分析業務のような IT 関連業務も始めました。例えば NTT 東日本が食材のムダを防ぐために行っている食堂データの集計分析業務を OCG が行っております。維持管理稼働に悩んでいた NTT 東日本の社員は、新たな課題に取り組めるようになり、生産性が上がりました。

OCG では、そのような NTT 東日本の業務システムの実績をベースに、社外のお客様向けのシステム開発も行っております。例えば、顧客情報や折衝記録などをファイルベースで管理しており、情報が個人に偏ってしまっているというお客さまの課題に対しては、OutSystems を用いて営業情報のデータベース化を行い、簡易なプロトタイプを作成した上で、機能追加や改善を行うアジャイルな開発手法をおすすめしました。

私共は、お客様ご自身がソフトウェア開発力を身に付けることをお手伝いするパートナーになりたいとも思っており、エンジニア育成のお手伝いもしております。NTT 東日本では、新入社員や中堅社員が、日本でソフトウェア開発の基礎を学び、さらにベトナムに滞在し、OCG の社員と実開発案件に取り組む研修プログラムをくみ上げました。こ

のプログラムでは、ソフトウェア開発の上流工程や下流工程の技術を習得できることに加えて、異文化理解力、語学力を鍛えられる良さもあります。デジタル&グローバル人材の育成の場として、お客様にもお使い頂ける場だと考えております。

デジタル＆グローバル人材育成研修の様子

NTT 東日本は、これまで通信事業者として保有する通信関連の技術を各国に提供してまいりましたが、ソフトウェア開発では、IT 人材大国に成長したベトナムの力に助けられております。日本の技術を諸外国に提供するだけではなく、東南アジアの優れた力を日本に取り込んでいくような、建設的な相互関係を形成していきたいと考えております。また、通信以外の領域、ソーシャルイノベーションを、東南アジア各国にも広げて、新たな価値をご提供できるようになることが今後の目標です。

特別寄稿

岩槻日記(24)

当会特別顧問　石井　孝

「内製化」

「KDDI が固定電話系システムを内製化、仕様変更や保守の現場を刷新」という記事を日経クロステックの中に発見した。

全く同じ様な試みを NTT は、民営化直後 1985 年から実行し、通信に関わるソフトウエアシステムすべての内製化を実行し実現した。以下に掲げるものは、この内製化を実行した通信ソフトウェア本部の「通信ソフトウェア本部発足 10 年史」（平成 7 年 6 月発行）の中における当時の児島社長のコメントである。

「『事業運営への更なる貢献と発展を』

日本経済はいま、大きな転換期にさしかかっています。いままでのモノを作れば売れた時代、めざましい経済成長の時代が終わり、土地神話の崩壊、年功賃金や終身雇用制度の見直し、世界に例を観ない高齢化の急激な進展、国際化の波など、日本経済を支えた経営構造や価値観が根底から変貌をとげようとしています。産業面ばかりか、社会・文化の面にも大きな質的変化が波及しつつあります。

情報通信サービス産業は、21 世紀に向けた日本経済の牽引役として期待されているところですが、電気通信市場についてみると、公衆線と専用線の接続などのネットワークのオープン化、携帯電話が一般加入電話を上回るなど、新たな動きがみられ事業環境も大きく変化を続けています。

民営化によって電気通信事業は、独占から競争の時代に入りました。他事業者との厳しい競争に伍していくためには、いかに迅速にコストの低減と品質を確保しつつ、多様なサービスをお客様に提供していくかにあります。

電気通信サービスは、通信ソフトウェアを中心に実現されているわけですが、各種新規サービスの根幹を実現している組織が通信ソフトウェア本部であり新規サービスの効率的な開発だけでなく、それらのメンテナンス及びソフトウェア改善をつうじて、信頼性の高いサービスを可能にしてください。

これからの情報通信産業の進展には、情報通信ネットワーク、コンテンツ、端末などを一体とした総合的ソフトウェアの実現力が大きく求められており、通信ソフトウェア本部の役割と責任はますます高まっております。この 10 年間の成果に安住することなく、新たな時代に向け果敢な挑戦を期待します。また、この 10 年史がこれまでの通信ソフトウェアを中心とする実用化開発の歴史を脈々と伝え、今後の事業運営に多大の貢献と発展をもたらすことを心から切望する次第です。」

当時としては、真に先見の明のある叱咤激励である。

さて、「この 10 年史がこれまでの通信ソフトウェアを中心とする実用化開発の歴史を脈々と伝え、今後の事業運営に多大の貢献と発展をもたらすことを心から切望する次第です」と言われたが、その後はどうなっているのであろうか。

児島さんは、つい先ごろ鬼籍に入られてしまった。

「時代が変わっても変わらないものがある」

「時代が変わっても変わらないものがある」と思っていたが、最近の世の中の出来事

を観ていると、「時代が変われば全て変わる」のではないかと思えてならない。
「人間の本質は変わらない」という人もいる、それは確かにそうかもしれない。
しかしながらが、人間の本質の一つに「人間は環境に作用され、それに順応する」という特性があるとするなら、時代が変われば全て変わってしまっても仕方ないのかもしれない。

「本社機能」

現在、多くの日本企業で試みられているデジタルトランスフォーメーションと称されるものは、現代企業におけるある意味で究極的な組織改革と言えるものではなかろうか。
このために、そうした各社に共通する狙いは IT 部隊を事業戦略の中枢に置くこと考えているようである。
かつて子会社として切り離した IT 部隊を本社に呼び戻すことで、迅速で柔軟なデジタル施策を実行できる体制を整えているようである。
嘗て、親会社はシステムの企画機能のみを本体に残し、開発・運用機能をシステム子会社に切り出していった。
しかしながら、システムの開発・運用機能が別会社にある体制が DX 時代には非効率になっていることがわかってきたのである。
ここで大事なことは、こうした組織改革を組織を使って全体的な改革として実行するには、強力で且つ的確な判断力を有する優れた本社機能が必須である事である。
持ち株会社が所謂本社で、実質的には機能と権限が完全に子会社の各社に分散されてしまっている所では、先ずは本社を抜本的に改革・強化が必須ではなかろうか。

「叱られてしまった」

先日、久しぶりに嘗ての仕事仲間から電話があり、昔話に興じた。
その際、N 社も IOWN なる構想を打ち出して、いよいよ GAFA に対抗出来る、全く末頼もしいと言うので、「実は私には、その IOWN なるものがサッパリわからない、一体何なんだと言うと」。
「N 社の OB として何と恥ずかしい男だ、お前は」、と厳しく「叱られてしまった」。
彼の説明によると、大雑把に言って IOWN のポイントは次の三点だと言う。
1.電子に代わる光技術（オールフォトニクス・ネットワーク）
2.現実と瓜二つの仮想空間（デジタルツインコンピューティング）
3.AI などを活用した通信サービス（コグニティブ・ファウンデーション）
1.については,現在進行形で、何となくわかる気がするが、これは基本的にはハードウェア技術と言えるのではないか。
2.3.については、いずれ黙っていてもそうなるだろうという漠然としたものでないか。
GAFA の対抗軸になるような IOWN の新しいソフトウェア技術は何なのかと聞いたら、明確な話は聞き出せなかった。
そう言えば、IOWN ではないが、電話番号をベースにしたナビゲーションシステムは N 社が創ったのかどうかは知らないが、面白いシステムである。電話番号をキーにしたデータベースの利用価値はまだまだ大いに期待出来る。
恥を忍んで教えて頂きたい。「IOWN とは、一体何なのですか」ぼけ老人に分かり易く。

海外グラフィティ

経理あれこれ

日本ﾍﾞﾝﾀﾞｰﾈｯﾄ社長　ｴｯｾｲｽﾄ　田上　智

今も個人事業主として、主として営業に従事しているが、もともとは経理屋である。経理のセミナーにも時々出席し、研鑽を積んでいるが、元来好きなので疲労感は無い。

先日も、知り合いの税務会計事務所主催のセミナーに同席した。教材は國貞克則氏の「財務３表一体理解法」で実に楽しかった。著者は、東北大学工学部機械工学科出身で、神戸製鋼所入社、アメリカで MBA を取得、現在は経営コンサルタントであり、著書も多数。自身、大学で簿記・会計を学び、アメリカでも MBA を取得。電電、NTT 時代でも、経理の経験は多い。本社は資材局原価調査課で、原価計算や、企業経営の分析など。現場も珍しく、電話局・庶務課会計係長。国際派に転じて、ガーナ郵電公社とスリランカ電電で CFO,クレディスイス証券で投資銀行部門のマネージングディレクターと経理経験は長い。

「財務３表一体理解法」の方で、最も興味があったのは、貸借対照表、損益計算書、キャッシュフロー表のうち、キャッシュフロー表である。この表はどちらかと言うと、素人目には脇役であるが、玄人好みの書類である。

事実上の黒字倒産をしていて、毎月の給与が払えなかったガーナ郵電公社の CFO 時代、とにかく、現金確保が一番であった。電話料金の回収率が２５％しかないので、当然の結果である。いつも給与の遅配で、頭が痛かった。誰も滞納の電話料を放置しているので、やむを得ず、自ら借金取りにまわった。

迷惑なのは実は職員だけでなく、業者とて同じこと。例えば、小切手を切っても銀行で不払いとなると、男の業者は、事務室のドアをけ破り、女の社長は目の前でわんわんと泣いた。労働組合が追いかけてくるので、昼間は街にとんずらする、夕方こっそり戻ってくるという次第。料金回収では、小切手を目の前で切るまで待ち続け、不払いでは、通話停止で対抗した。建設勘定は大蔵省に出かけて行って、次官に土下座して小切手を切ってもらった。次官も心得たもので、気配を感じると、すっと、裏口から逃げる。そこで、秘書を手なずけてチップを渡して協力してもらった。背に腹は代えられないので、この建設勘定の残高を資本勘定に振り替えて何とか給与の支払いに回した。もちろん、あとで、建設勘定にもどしはしたが。その後、回収率も頑張って９５％にまで上げた。

料金値上げも２度実施、お陰で給与の遅配はすべてなくなったのだ。電話料金のあて先違いが多々あり、返送された請求書が箱一杯になり、試験カードを基に大々的な修正作業もした。いつかは、事態を重く見たガーナ中央銀行が私を呼びつけ、狭い部屋に２時間ほど閉じ込め、キャシュフロー表の作成を迫られた。いまなら、れっきとしたパワハラである。

このような経験をした結果、財務３表のうち一番重要なのは自分にとってキャッシュフロー表であり、はらわたに染み渡る実務を通しての数字なのである。ガーナでの経験が初めてではない。電話局の会計係長の時には、電話帳の広告料の滞納で、神奈川県茅ケ崎まで追いかけて行ったことがある。個人情報が今ほどやかましかった時代ではなく、住所を何とか追跡して不払いを回収した。また、ある時は足立区まで２度行き、スキンヘッドの大男から回収したこともある。同行した庶務課長はがたがた震えていた。まさに、経理は、静かな業務でなく、格闘技なのである。そして、在野の経済学者・高橋亀吉ではないが、「経済は理論ではなく実践」なのである。(2021.11.28 完)

海外便り

やどかり族の中国俳柳紀行序章(4)

（1996 年 8 月 3 日～同 25 日）

元 JICA シニアボランティア
北垣　勝之

＜事務局注＞本稿はやや古いが、かえって新鮮であり、切にご寄稿をお願いしたものです。

8 月 11 日(日)

成都市内の探検に繰り出す。まずは明日から出かける峨眉山行きバス予約のため、人民南路から錦江沿いに歩いて新南門バスセンターに行く。一仕事終えて気楽になり、そこから望江楼公園へは輪タクならぬバイタク(50cc バイク牽引の人力車)で向かう。人の良さそうな運チャンと交渉の結果、運賃は二人乗り 5 元、風を切りながらバスや自転車の錯綜する街路を走る。日曜日とあって公園内は人でごった返していたが、百数十種類のいろんな竹を植え込んだ園内は広く、望楼あり、餐庁・茶屋あり、遊戯施設ありと庶民が憩うには絶好の場所である。我々も竹林の一角に竹製のテーブルとイスを勝手に持ち出し、自然の野外喫茶を愉しむことにした。蓋付きの湯飲み茶碗にお茶葉を入れ、各テーブルを回りながらウェーターの爺様が、煤けたヤカンから熱い湯を注いでくれるのを待つ。時折そよ風が竹の葉を揺らし我々に涼感を恵んでくれる。あゝ何という風情だろう。まわりの人々は持ち込み自由の弁当を広げたり、麻雀に興じたり、それぞれ家族や仲間と思い思いの時間を好きなようにして過ごす。我々は「成都の茶」がすっかり気に入ってしまった。ヤカンの爺様が我々のテーブルに来ては湯を注ぐこと 7、8 回はあったろうか、その数も忘れてしまうほど長居をしてしまう。時間的には約 2 時間、ゆったりと避暑を兼ねた休憩を満喫する。私にとっては、このところ体調が優れず血便も出るくらいお腹を悪くしていた。従って日中の食事は果物とアメ程度に抑えていたが、この喫茶のお陰で快気快調に転ずることができた。

私にとっては何ものにも替え難いオアシスとなった望江楼公園を後にして、公共バスに乗り杜甫草堂を目指す。青羊宮行きのバスを途中で降り、百花潭公園を通り抜け市場や露店を覗きながら約半時歩く。安史の乱を逃れ 760 年から約 4 年間杜甫が住んだ成都、そこで彼が 240 余りの作詩をした場所がある。それが杜甫草堂で竹林に赤壁の小径、草蒸す白壁もある。緑なす池塘の東屋、折々に百花ありて、どこか京都の庭園を思い出させるものがある。広大な園内には観光客とおぼしき団体の群れが次から次と現れる。こうなっては一人思策に耽ることなどできない。あちこちでガイドによる日本語の説明も聞こえてくる。入園料外国人価格一人 30 元も高い、とにかく観光名所になり過ぎて面白くない。疲れた足を引きずって帰途につく。途中「成都の茶」が恋しくなって近くの茶屋に立寄り休憩、夕食は腹具合を案じホテルのレストランでうどんを特注する。

8 月 12 日(月)

タクシーで新南門バスセンターへ、予約の峨眉行きバスは意外やミニバスであった。狭い車内に補助イスも使い目いっぱい客を詰め込んで出発、片道四時間半、ほとんど休憩なしで突っ走る。この運チャンがすごい、走行中運転席の窓を開けて外へ痰を吐き出す。時には手持ちのガラス瓶から水を含み、うがいをするや否やぺっと吐き出す。一度や二度ではない、しょっちゅうやっている。お陰で運転席のすぐ後ろに陣取った私は、その都度飛沫の洗礼を受ける。そう云えば至るところで平気で唾を吐く人を目撃した。「カッー」と言っては「ペッ」と吐く。この連中を私たちは「カッペ族」と呼ぶことにした。何でも効く漢方薬の名産地にありながら、気管支の良薬だけはないのかしら。あ

るいは最近の急激なモータリゼイションによる大気汚染に人間の喉が冒され、それに対抗する薬剤開発が未だ追いついていないのだろうか。つまらないことを考えているうちに峨眉に着いた。

峨眉バスセンターから峨眉山へ上るミニバスが発着する報国寺まで行くのが実は大変だった。その辺りの土地感覚が全くないところに、今まで乗って来たミニバスが報国寺まで行くと聞いたので、ほとんどの乗客が降りたにも拘わらずそのまま乗っていると、運転手が交代し走り出す。すると案内人らしき者が、峨眉山に上るなら今晩は報国寺の何やら旅館に泊まって、明朝午前3時発の御来光ツアーで出かける方が安上がりだしタイムリーだと言う。我々は麓で一泊するつもりはなく、今日のうちにどうしても山上に行きロッジに泊まりたいのだと主張した。するとロッジはべらぼうに高く一泊600元だが、ここだと一泊250元で済むと言う。彼と問答しているうちにその旅館の所まで来て、残りの乗客は皆降りてしまった。我々はさらに街道を少し戻り某レストランまで連れて行かれ、峨眉山終点まで600元で運ぶから先ずはここで何か食っていけと言う。事前調査のミニバス代一人30元とあまりにかけ離れているので駄目だと断る。それなら300元ではどうかときた。こういう奴等とこれ以上係わり合うのはやばいと悟り、とりあえず街道を往来する公共バスに飛び乗ってその場を離れることにした。結局、停留所一つ先でバスを降り、そこから約1km歩いて報国寺のバス溜り場にたどり着く。そこで峨眉山へ行くミニバスに乗り込んだ。しかしこのバスがなかなか出発しない。乗客は北京から来た親子二人と我々だけ。運転手と連れの車掌は道端で行き交う人々に向かって、「オウメイ、オウメイ」(峨眉の中国語呼び名)と叫び客引きをする。なかなか乗客は増えない。今度は車を走らせながら窓から顔を出して「オウメイ」と怒鳴り始めた。我々が散々苦労して悪質駕籠かき屋から脱出した地点まで行ったり戻ったりするではないか。何たることか、ここではバスの時刻表など無い。彼等は満席になったら目的地に向け出発するつもりなのだ。もう午後2時過ぎ、昼飯も食わずにかれこれ2時間も足踏みしている勘定になる。こんな所でいつまでも客引き車に付き合っていてよいものかと一瞬不安がこみ上げる。その時、同じように客待ちしていたミニバスに出会う。様子を窺うとそちらの方の乗客が多そうだ。運転手同士なにやら相談していたが、結局我々四人はその車にトレードされることになった。報国寺から車で行ける一番高い所の雷洞坪(標高2430m)まで約1時間、バスはだんだん山の奥へと上がっていく。中国大陸の神秘的な聖山がヴェールを脱いでいく姿にうっとり見とれていると、さっきまでの人災は嘘のように忘れてしまった。

雷洞坪からロープウェイ乗り場まで500mは誰しも歩いて上らなければならない。但し、この間をモッコのような物で二人の強力に担がれて登る手はある。私は興味が無いので料金が幾らか聞かなかったが、相当ぼられるのではなかろうか。

ロープウェイに乗るとき、例の調子で中国人になりすまし切符(20元/人)を購入、だが乗り場で係員から家内が何やら話しかけられ外国人であることが発覚してしまった。二人とも差額(20元/人)を払う羽目になる。混雑していたので家内と離れ離れになったのが悔やまれる。ここのロープウェイは川崎重工製、同じ日本製の人間が乗るのに何で倍額払わなければならないのか外国人価格への怨みがつのる。北京から来た親子連れは外国人が高い料金を払うことにさほど疑念をもっていないようだった。彼は上海の大学時代、長崎から来たという先生に日本語を習っていた由、私とは北京語と日本語を混ぜて会話を交わす。現在、北京に住み、娘の方は完璧な普通話を話すが、父親の中国語は上海訛りの北京語であった。

峨眉山の山頂から見渡す四囲の眺望は中国大陸の大きさと山水画の世界を思い知らせてくれた。太陽が西に傾く様を茫洋と心ゆくまで堪能した。中国仏教三大霊場の一つたる由縁も偲ばれる。山頂ロッジの宿泊料金は、麓の駕籠かき屋がほざいたような高額ではなく、ツイン一泊360元とリーゾナブルなものであった。(次号に続く)

メッセージリレー(2)

平素より ICT 海外ボランティア会(ICTOV)に多大なるご支援・ご協力を賜り、誠にありがとうございます。当会ではこのたび、当会会報配信先の皆様から、「私の海外とのかかわりなど」につきまして、当会会報にリレー形式(五十音順)でメッセージをお寄せいただくことを企画いたしました。順番に別途ご依頼いたしますので、ご多忙のこととは存じますが、何卒よろしくお願い申し上げます。

お寄せいただきたいメッセージの内容は次のとおりです(全部又は一部選択可、文字数自由、図・写真添付可)。

①今までの海外活動のご経験など
②最近取り組んでいることなど(仕事、趣味、旅行、健康など)
③最近笑ったこと、うれしかったこと、感動したことなど
④ICT 海外ボランティア会(ICTOV)へのご意見など
⑤その他(皆様への呼びかけ、メッセージなど)
⑥お名前(必須)

なお、過去の事例は当会ホームページに掲載しております。
https://ictov.jimdo.com/会報/

秋山 正則

①私の海外経験

1993 年 4 月から 1996 年 3 月まで、タイ国の TT&T 社に出向し、現場の作業を支援しました。勤務場所はタイ国東南部（チャチューンサオ県、チョンブリー県、ラヨーン県など 8 県）で、九州と四国を合わせたほどのエリアを、車でぐるぐる回っていました。このため、1 カ月に 1 回くらいしか同じ職場に来ない仕事をしていました。

会社をゼロから創るという性格もあったのでしょうが、営業の人たちも、所内の人たちも、所外の人たちも、とても明るく、積極的で、活気のある職場でした。

このような職場環境の中、現場で働く人たちは、よそ者である私を、気持ちよく迎え入れてくれました。頼んだことには答をくれ、また、現場はどんな状況なのか、話をしてくれました。

聞いた話から私の行動が始まります。とても充実した 3 年間でした。

②私の今

今は、週 2 日のアルバイト（電話番）をしています。

そのほかの日は、自宅にいて、起床し⇒部屋を掃除し⇒ブランチを食べ⇒昼寝をし⇒1 万歩目標の散歩をし⇒少し本を読んで⇒晩酌をしながら夕食を食べ⇒就寝、という日課になっています。

散歩は近くの鶴見川の土手を歩き、川の蛇行と緑の木々とが織りなす景色が、とても気にいっています。

海外とは全く関係のない生活です。

東　孝志

①フランス共和国・INA(フランス国立視聴覚研究所)を訪れて

技術革新もアナログからデジタルへと確実に変革している、あれは確か 1998 年頃に、仕事の調査で、フランス共和国の INA(フランス国立視聴覚研究所)にお伺いいたしました。

みなさまもご存じのとおり、フランスの全ラジオ・テレビのアーカイブとしての組織ですが、当時、各データをアナログからデジタル化する様子を調査してきました。

INA は 1975 年に設立され、2006 年より歴史的番組一万時間分の映像を無料でネットワークサービスとして提供しているとも聞いております。

お伺いした時に、編集作業をやっておられた、若い技術者に、これは何のためにやってらっしゃるのですかとお聞きしたら、「将来の子供たちに文化を伝えるためだと」と言っておられました。

日本では、今、どうなっているのでしょうか・・・・。

たまたま、知り合いに文化庁の方がいらして、最近、お会いした時にその話をしたら、彼も若い時に 1 年ほどフランスに留学していたそうで、INA のことはよく知っておられました。

残念ながら、フランスを訪れるのは、これが最初で最後でしたが、最近は、イギリス・ロンドンにはよく訪れます。また、フランスとは異なり、王室とビートルズの世界ですかね。

最近の新技術は AI とかメタバースとか言われますが、日本の文化の発展のことも新技術で貢献してほしいものですね。

阿南　修平

①早いもので、70 歳を超えてしまい、亡くなる友人が増えてきました。少しｺﾞｰﾙがみえるような日々を人生を振り返りながら送っています。

日本電信電話公社に 1976 年に入社、当時は、5 次 5 カ年計画とかで、電話局勤務では、固定電話の架設工事が中心でした。電柱にのぼり「青・黄・緑・赤・紫、白・黒」を唱えて、ｻｰﾋﾞｽｵｰﾀﾞを行っていたことを思いだします。

いまはｽﾏﾎの時代、携帯端末がｺﾝﾋﾟｭｰﾀになり、何でも可能になりました。音声通話からﾃﾞｰﾀ通信へすごい技術発展で、国内外で無料のネット会議が可能となり、驚きです。

隔世の感があります。

私の専門分野（土木）とは関係なく色々な分野の通信業務に関与でき、海外事業にも参加し、ﾘｰﾀﾞとなって直接事業経営に従事することができました。

今は田舎で農業を行っており、稲の成長をみております。自然の移り変わりを身にしみて感じる今日この頃です。自分の人生を振り返ると、色々挑戦、沢山の事を経験させていただいたかな、とあまり思い残すことはないような気がします。今まで大きな病気もしてないし、もう少し生きれそうなので、ｽﾏｰﾄ農業や小水力発電事業に挑戦してみたいと思います。お互い残り人生、恥かしいと思わず怖がらず大いに楽しみましょう。

井原　順次

①私の海外活動

２８歳の時、知人から JOCV　ネパール OB(通信線路)の活動経験を聞き、JOCV ネパール隊員に挑戦したのが海外活動の始まりでした。

ネパールでは地方の開局の加入者線路設計と、カトマンズ市内の加入者線路整備工事設計、及び地方の新設局の加入者線路工事の監督に従事しました。日本では経験できない設計～施工まで従事でき、貴重な経験でした。

ネパールは世界最高峰エベレストをはじめヒマラヤ山脈があり、毎年登山家が多く訪れます。そして仏陀（ゴータマシュダールタ）が生誕した国でもあります。生誕の地は世界遺産ルンビニで南部のタライ平原の小さな村です。ルンビニの町は丹下健三のマスタープランに従って、大規模な整備が進められております。

ルンビニは仏陀の母マヤデービーが里帰り中に休息していた時に仏陀が生まれた場所です。私が訪れた時、仏陀誕生の石碑があり、マヤデービーの脇から生まれた言い伝えがあり、その様子が写真の石碑です。

エベレスト（サガルマータ）

ネパールから帰国３年後、ＮＴＴ国際部で中国の郵電部をはじめアジアの数か国の電気通信運営体との覚書技術交流及び、コロンボ計画に基づく海外技術者の研修業務に従事しました。

次の海外活動はＮＴＴインターナショナルでＪＩＣＡのタイ王国の電気通信長期計画及びバンコク首都圏電気通信長期計画の調査案件に３年半従事し、また短期間ですが、ギリシャのマスタープランの事前調査にも参加しました。

その後、タイ国のＴＴ＆Ｔにて地方部の電話１００万回線の建設・運用に２年半従事しました。

国内での国際業務と海外活動で通算国際業務 10 年になります。

②近況

２０１４年５月、全国約１万事業所をもつサービス事業会社の電話系サービス運用支援チームを立ち上げ、現在はメンバーとして業務に従事しております。

全国にまたがる事業所の電話サービスおよびビジネスホンの故障、SO 対応を実施しております。

最近感じるのは一年を通して災害が多いことで、故障が以前より多く、驚いております。特にアナログ回線では CCP ケーブルの心線故障、保安器老朽化及び落雷のよる TA 故障が多発しております。

2021 年５月から在宅で業務を行っておりますが、昨年１０月から今年の５月まで都合で都内の葛西まで通勤していましたが、通勤における駅構内の下り階段で不安を感じ、空間認識度が下がっていることに気が付きました。また、通勤でのエネルギー消費も相当のものだと感じております。現在は在宅の為、通勤のエネルギー消費に代わる、代替運動として毎朝１時間の散歩を実施しております。散歩コースは近くの運動公園までの往復で、緑が多く草木及び鳥・虫の鳴き声の季節の変化を楽しんでおります。

今川　眞治

①今までの海外活動のご経験など

私は 1973 年に電電公社（NTT）入社しました。以後、在職中に国際関係業務は通算して約 30 年弱の間、従事する事が出来ました。最初の海外現地業務は 1991 年にインドネシア PMC５プロジェクトテンダーサービスメンバーとして参加、１年弱の期間赴任でのスタートでした。以後、海外業務は数年間に渡る赴任ベース、または数日間の出張ベースで多々経験させて頂き、国別では合わせて１０カ国を経験させて頂きました。最後はベトナム国で経験して終了する事になり、国際関連業務経験は計約３０年間に渡りました。

気が付いたら随分色々な国々（アジアの国々が主です）を経験させて頂き、長期赴任中に健康を損なう事も無く業務を遂行する事が出来て、最近になって自分が潰れる事も

無く、元気でいた事に感心する次第です。
長期海外活動（赴任）させて頂いた国はインドネア、フィリピン、タイ、ベトナムでした。その他の国々は短期出張ベースで現地業務経験をさせて頂きました。
では、「何をやっていたの」「どんな活動をしていたの」の話になるのですが、大きく分けて、第１部（NTT 在職時）の電気通信に関わる海外活動、第 2 部（NTT 退職後）の日本企業様の海外進出に関わる活動になります。何か聞えは良いですが、実際の業務は種々様々でして、またビジネスの上流から下流まで色々と経験する事になりました。

第１部では、海外案件の発掘、案件形成、電気通信案件への応札、プロジェクト管理、研修、技術移転、協同研究、実証実験、関係構築等々についての業務でした。１９９１年に出向した NTT インターナショナル、１９９９年に復職した NTT 東日本、２０００年に NTT ベトナムへ出向、２００４年に再復職した NTT 東日本で２０１０年の退職まで国際関係業務に携わる事が出来ました。国別での個々の対応履歴は長くなるので省略しますが、この期間に NTT 投資案件 FS、関連他社投資案件 FS、デューデリジェンス、ODA 案件、JICA 案件対応経験も含まれていますので、一介のエンジニアとしては得難い経験をさせて頂いたと感じています。
2010 年に NTT 東日本を最後に 38 年間務めた NTT を退職しました。38 年間の NTT 在職で約 20 年間以上にわたって海外関連業務に従事させて頂きました。簡単な履歴ですが、国際関連業務に関わる際、私は電気通信エンジニアという事でアサインされていました。電電公社入社当時はラジオ少年レベルの知識、ハンダコテが人よりは多少上手く使える技術程度でした。当時、海外に行きたい、海外で技術協力の仕事をしたいという単純な思いが有り、近道として青年海外協力隊にまず入りたい、そのためには何らかの技術を身に着ける必要がある。そのためには電電公社に入社した方が早い、そして運良く電電公社に入社出来ました。入社後、交換機の保守運用の仕事からスタートし、交換機、伝送無線、電力、他所内系設備の保守、運用、設備計画、設計、建設、等々を 10 年あまりで駆け足で経験してきました。既に歳を取り青年海外協力隊の道は殆ど閉ざされており、次に何をやろうかな、の状況でした。この時にタイミング良く、また運良く NTT の国際関連業務に従事出来た次第です。この NTT での海外経験が退職後の第 2 部の海外活動の元になり、当初の海外に行きたいという単純な思い以上に海外で新たな各種の業務経験を得る事が出来まして、NTT 退職後の波乱万丈に繋がったかと感じています。

第 2 部（NTT 退職後）ですが、2010 年 NTT 退職後間も無く、第一部で経験した世界とは違った領域で海外業務をスタートする事が出来、新たな経験と生活がスタートしました。以後は、電気通信とは異なる世界で、海外の仕事に色々と直面する事になり、何とか着地する事が出来ました。そして昨年あたりから、いわゆる体力の限界が感じられる様になり、2023 年 2 月を持って引退帰国をしまして、現在体調回復に努め、引退生活を始めた次第です。
第 2 部の業務履歴ですが、いずれも活動拠点の多くはベトナム国です。ベトナムは第１部の NTT 時代に約 10 年に渡り赴任、出張で経験を積んでいましたので、何とか新しい仕事でもやっていけると思いました。それから 12 年のベトナムでの経験を上積みする事になり、ベトナム国は結局合わせて約 22 年以上関わる事になりまして、同国の発展を目の当たりに見ながら、海外経験を積む事が出来ました。第 2 部の業務履歴の概要ですが、・通信ソフトウェア会社のオフショア事業の展開、・工業団地開発会社の日本企業様向け営業、日系企業の海外進出コンサルタント、・JETRO 新興国進出支援専門家として中小企業様海外進出のアドバイザー、・日本の総合建設会社様の現地合弁会社設立支援、立ち上げ業務、・現地日本語学校での日本語教師、・現地建設会社の事業企画、アドバイザー、等々を経験してきました。

上記、私の履歴概要ですが、良く聞かれる事が有ります。今川さんは何屋さんですか？私の海外業務経験で専門性を問われるとどの様に回答すれば良いのか難しいです。
諸先輩のご指摘を受けるかと思いますが、ＮＴＴ時代（１部）ではいわゆる所内系エンジニアかと思います。また退職後(２部)はおこがましいですが、海外事業アドバイザーかと思います。
自分ではとにかく何でもやりましたし、やるしかないの気持ちで頑張った処はあります。そして、評価の程は分かりませんが、何とかやり遂げて来たかと思っています。但し、正直奥深い処までは触れていなかった部分があるのは確かかと思います。また、やり残した事が有るのは確かかと思います。いい加減な仕事をしたという事ではありませんが、今頃になって、もう少し頑張れた、違う方法が有ったのではと、あれこれと思い出されてきます。

海外での色々な経験の中で思い出される事、気が付いた事があります。当たり前の事について、発想の違い、柔軟な考えをする事で、ずいぶん変わった形が見える事があります。例えば、海底ケーブルですが、海底に敷設出来ればＯＫで済まない事もあります。陸上にも通信ケーブルとして敷設する事があります。田畑のあぜ道の上に管路が敷設され、マンホール内で接続される海底ケーブル。初めて現物を見た時、あれはなんだ？で驚きでした。
また、防災通信（情報）システムの計画で必ず課題になるのが、国の政府機関、行政機関、警察、消防、軍隊等がバラバラに計画、構築、運用しているケースが殆どです。自分が主役で頑張ってしまう事が多いです。これでは十分な役割と機能が発揮できなく、残念な状態が見受けられます。
世の中で提供されているサービス、技術、環境の発展スピードと人々の要求が従来のやり方だけでは全く対応出来なくなる時代に来ているのではないかと思いますので、日本人の持つ吸収力を持って、幅広く柔軟な発想で、海外に出て行く事が必要だと改めて思う次第です。

②最近取り組んでいることなど(仕事、趣味、旅行、健康など)
よく有る言い訳ですが、不徳の致す処で海外が長かった、不安定な生活環境だったせいで、これと言った趣味らしい趣味はありません。最近になってボチボチと探し始めた処ですが、今からではシニアボランティアは無理なので、日本で何か（例えば技能実習生の支援等）協力、支援が出来ないか模索しています。
また、歳が歳で、正直健康にやや自身が無くなってきたので、日々のランニングを欠かさない様にしています。そして、何とか今年の冬には３０歳まで頑張っていたスキーに挑戦したいと思っています。

③最近笑ったこと、うれしかったこと、感動したことなどですが
退職後ですが、私が日本に帰国後、路頭に迷っているかと心配をしてくれて、ベトナム人の友人(後輩)が、仕事の紹介で連絡してくれた事です。

④ICT 海外ボランティア会(ICTOV)へのご意見など
NTT 在職中に諸先輩の経験談等を聞きたくて会合に参加させて頂き、何時も自分のモチベーションを維持していました。この 10 年ぐらいは海外赴任等も有り、会合等に出席出来ず、ご無沙汰して大変失礼をしてきましたので、今後は会合等に是非参加して行ければと思います。未だにまだ若造ですが、よろしくお願いします。

⑤その他(皆様への呼びかけ、メッセージなど)
　最近になって、私は親しい友人、先輩、他企業同期赴任者と月１程度会う機会がありますが、話がどうしても健康に関する歳寄り話が中心になってしまいます。今更で申し訳ありませんが、是非皆様から昔話、電電公社時代、昭和のあれこれの話をお聞きしたいです。何方か面白い話を聞かせてくだい。
　上記、長々としたメッセージで申し訳ありません、失礼をいたしました。

岩名　孝夫

①今までの海外活動のご経験など
　１９９３年大阪研修センタの課長になって二年目に、会社の人事からタイ王国でのTT&Tのプロジェクトがあるので、受けてみないかと言われて、英語もできないのにと思いながら受験したら、東京でのバックアップするタイ事業推進室（後の海外事業推進室）に三月に異動。その年の一月に大阪で右眼の白内障手術を受け、三ヶ月後同じ目を網膜剥離になり関東逓信病院で手術と波乱のスタート。
　ベルリッツスクールにも行かせてもらい、バンコクへの出張、TT&Tの要人のアテンド、研修生の受け入れなどあっというまの、二年間でした。
　１９９５年５月からフィリピンのSmart Communicationsへ赴任。若い国で若いスタッフとの仕事は楽しいものでした。１９９７年７月に帰国し、関西支社の法人営業部で上海の新空港情報通信システムへのプロジェクト応札が帰国後の仕事でしたが失注。その後バンコク第二空港（後のスワンヌブーム空港）、中部国際空港のコンサルティングを経験し、2001年大阪支店に異動するまで約８年海外関連の仕事に従事できました。

②最近取り組んでいることなど(仕事、趣味、旅行、健康など)
　30歳の時、オートバイ（250CC）を再び手に入れ、750CCのホンダ。1000CCのBMWと乗り継ぎ、現在も1978年生まれのBMWR100RSで今年五月に軽井沢で年に二回開催される「浅間ミーティングクラブ」参加しようと前泊地の佐久市でバイクの故障で頓挫。本人もバイクも高齢！

　フィリピンより生まれ故郷奈良に帰国以来､父がやっていた米作り(5反)を引き継ぎ、現在も約三反の田圃で「あきたこまち」と「一目惚れ」を「いわな米」として栽培販売しています。
　54歳だった2007年からお世話になっている古河電工での仕事は、67歳までフルタイムで雇ってもらい、それ以後週に2～3日の派遣者社員で今も仕事を続けております。
　十数年前に始めた、FaceBookでは、フィリピン時代のローカルスタッフ多数と連絡が取れることになり、コロナ渦までにたくさんの、Smart Communicationsの皆さんが、単独で、そして家族で関西を訪ねくれました。

③最近笑ったこと、うれしかったこと、感動ことなど

5月に長野県佐久市で壊れたバイクを前に途方に暮れていたが、チューリッヒの保険会社のスタッフ、レスキュー会社の若者、奈良のバイク屋 MotoPower の方々に助けていただき感謝です。

⑤その他(皆様への呼びかけ、メッセージなど)

TT&T のプロジェクトで大変お世話になった、山下満男さんが、FaceBook で再開し昨年秋に「いわな米」を購入していただいた矢先、今年 4 月 1 日に突如向こう岸に逝かれました。

三度目の西国八十八ヵ所参りも終わり、FaceBook に投稿されていた最中でした。謹んでお悔やみ申し上げます。

国際交流基金の動き

日本語パートナーズ派遣事業の募集

事務局

国際交流基金(JF)は、2023 年度の日本語パートナーズ派遣事業の募集を開始しました。日本語パートナーズは、アジアの中学・高校などの日本語教師や生徒のパートナーとして、授業のアシスタントや、日本文化の紹介を行うものです。専門的な知識は必要なく、応募要件に当てはまればどなたでも応募できます。アジアで多くを発見・吸収し、それを周囲へ、未来へ広げる…そんな人になってみませんか？募集一覧等は下記サイトのとおりであり、奮ってご応募いただければ幸いです。

https://asiawa.jpf.go.jp/partners/apply/

ウェブサロンの話、あれこれ

第 19 回 ICT 海外情報ウェブサロン模様

事務局

第 19 回 ICT 海外情報ウェブサロンが 2023 年 7 月 22 日(土)19 時～21 時、ウェブ会議室において開催された。講師は当会ウェブサロン初の女性講師、南川真海子様(JICA 青年海外協力隊事務局主事)、演題は「海外協力隊で得たことや今後の協力隊事業の方向」であった。講師は JICA 青年海外協力隊(JOCV)としてナミビアに派遣され、ベトナム、マーシャル諸島で企画調査員、セルビア短期出張などを経験され、現在は JOCV 事務局に勤務されている。当会のウェブサロンで最大の参加者があり、活発な会話もあり、時間を忘れて楽しいウェブサロンとなった。講師を引き受けていただいた南川様には深く感謝の意を表します。

主な話題を以下に示す。

・大学卒業後、(株)アスキーに就職し、2 年後に JOCV の PC インストラクターとしてナミビアに派遣された。

・ナミビアは当時、人口約 190 万人であったが、現在は約 253 万人に急増している。それでも、人口密度は世界で 2 番目の低さである(モンゴルが世界一)。

・人口増加に対して学校・教員数が足りない、ジニ係数(貧富の格差)が大きい、HIV 罹患率が高い(成人 13%)、失業率が高い、などの課題がある。

・ボノフィ中等高等学校に配属された。教員数は約 30 名、生徒数は約 900 名(うち 700 名が寮生)、学級数が 23 クラス(中 2～高 3)であった。担当教科はコンピューターだけでなく、数学、体育、美術も実施し、2 年目からは担任も受け持った。

・学校で驚いたことは、「先生、宿題を出してください」と生徒から言われたことである。日本の学校ではよく宿題が出るが、その幸せを思った。

・教科書が少なく、教員が黒板に書き、生徒がそれを書くことが多かった。教員のレベルは一般的には低かったが、現在は国が教育のレベルアップに力を入れている。

・8 人兄弟などでは、中学校に行く子は一部の優秀な子だけであった。学校を辞めて市場などで働く子も多かった。

・協力隊経験で得た気づきとして、感謝することが幸福につながっていること、大人も子どもも幸せそうに役割分担していること、他人とシェアし許し合う心を持つことが挙げられる。翻って、日本人は幸せなんだろうかという疑問も出てくる。

・ベトナムでの企画調査員(ボランティア事業)は、看護師、作業療法士、助産師などの支援であった。ベトナムの看護師は医者に近い業務を任されることもあり、日本の看護師免許でできない業務もあるため、徐々に 5S 指導業務などにシフトした。
・ベトナム戦争時の枯葉剤の影響で、障がい者や自閉症児も多かった。
・マーシャル諸島は真珠の首飾りと言われ、風光明媚であった。一方で、糖尿病患者が多かったり、ゴミの山が一番高い山になったりしていた。食事は問題なく、お米、フライドチキンなどをよく食べた。ラーメンが人気であるが、袋にお湯を満たして食べることに驚いた。
・太平洋戦争に伴う遺骨収集が続いている。ビキニ環礁で被爆した第 5 福龍丸事件も負の遺産である。同地での原水爆実験は合計 67 回、広島原爆の 7,200 発分に及んでいた。
・戦時教育された日本語もあめ玉(キャンデー)、草履など少し残っていた。
・気候変動の影響は大きく、海水レベルが上昇したり、木が倒れたりすることが多い。水源としては空港滑走路の雨水を貯水していた。
・主要産業は漁業、観光業、コプラであるが、国家予算の 7 割は援助によるものである。
・マーシャル諸島は以前、中国を承認していたが、現在は他の世界 12 カ国とともに台湾を承認している。

・協力隊事業は 2019 年に制度変更し、年齢区分を改め、一般案件とシニア案件による区分となった。いずれの区分でも派遣時は同一待遇が適用されるが、シニア案件には別途経験者手当が支給される。
・応募者数は年々減少している。
https://www.sangiin.go.jp/japanese/annai/chousa/rippou_chousa/backnumber/2019pdf/20191101082.pdf
・“高い技術や経験”が求められるというイメージであった協力隊像を“好奇心と利他心”があれば努力や工夫で活動可能な要請もあるという面を伝えたい。また社会課題の解決や SDG s への貢献といったリブランディングを進めている。
・複雑化する課題に取り組むため、事業の枠を超えて「JICA グローバルアジェンダ」に取り組んでいる。
・2023 年度から帰国後の社会還元表彰を実施したところ、107 件の応募があった。大賞に選ばれたのはフィリピンへの派遣者であり、帰国後、義足を 3D プリンターで安価に製造する会社を起業し、最近、フォーブスにも掲載された。
・JOCV からの帰国後は、日本も元気にしていく存在になるよう、地方創生(地域の活性化)、多文化共生社会、起業(国内外の社会課題解決)、所属組織の海外展開など、社会貢献への支援を強化している。本年 6 月に改訂された開発協力大綱においてもその旨謳われている。

・グローカルプログラム(派遣前型)として、派遣前の隊員のうち希望者に対して、自治体等が実施する地方活性化、地方創生、多文化共生等の取組みに 75 日間程度、OJT 参加することを進めている。

【グローカルプログラム（派遣前型）の概要】

派遣前の隊員のうち**希望する者**に対して、自治体等が実施する地方活性化、地方創生、**多文化共生**等の取組みに**OJT**として参加機会を提供する

【目的】
1.国内課題の理解と帰国後の社会還元の促進
2.派遣中の活動に必要なスキルの獲得

【対象者】
日本の地域課題解決に将来に亘り取り組む意思を有する者（現職参加者は参加できません）

【期間】派遣前訓練前75日間程度

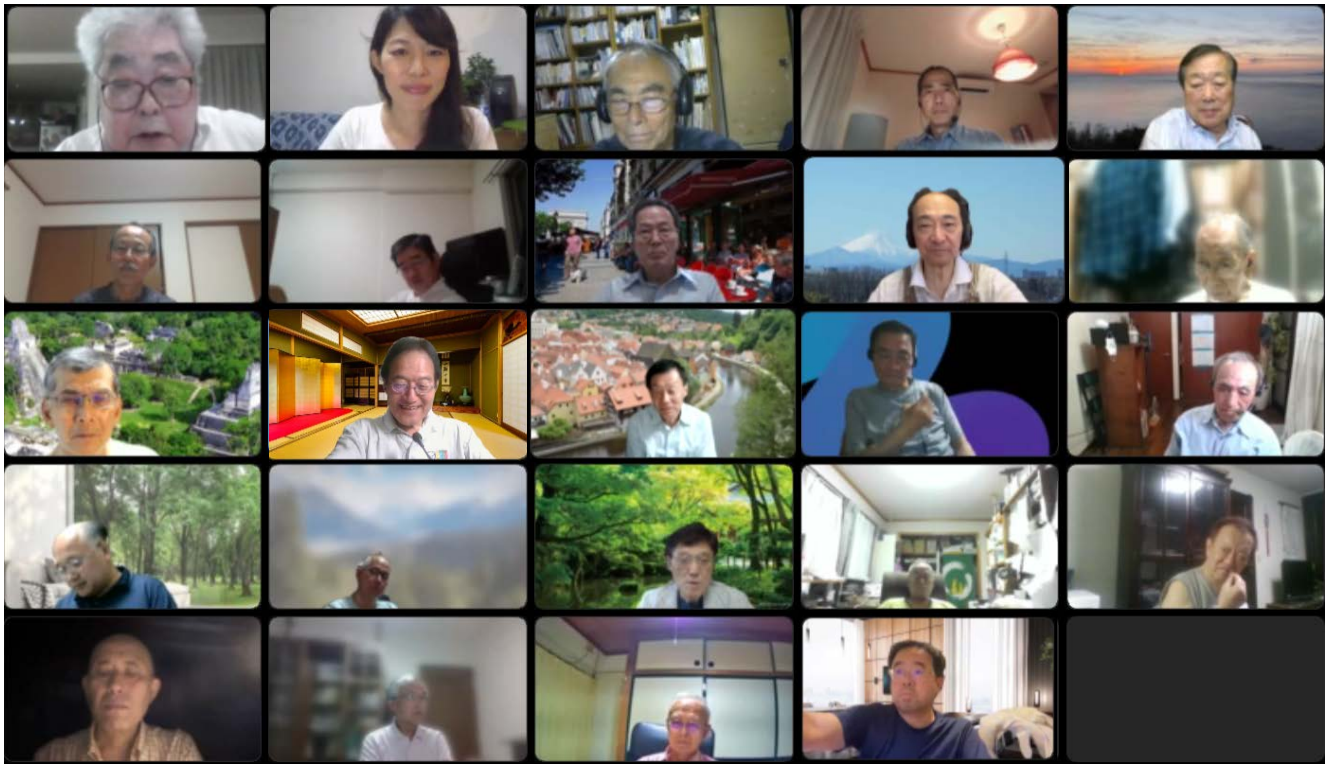
【処遇・手当】宿泊費、手当等を支給

・コロナの際はマーシャル諸島の企画調査員だったが、同地でいち早く対応し、2020 年 3 月に約 20 名の帰国を支援、中には派遣住居に戻れないまま帰国した者もいた。その後すぐに帰国便が運行しなくなり、5 月の再開便で帰国することができた。しかし、グアム経由なので同地で 3 日隔離され､成田でも隔離､その後 2 週間の自主隔離があった。
・2020 年 11 月、ベトナムへの再派遣が実現したが、その後は停滞し、待機を余儀なくされた。しかし、本年 6 月 1 日現在、65 カ国に 932 名を派遣しており、2024 年度までにコロナ禍以前の派遣規模 2,000 名を目指している。なお、一斉一時帰国後、累計 66 カ国 1,204 名を派遣済である。

質疑応答が数回にわたり実施されたが、多くの参加者から多数の質問・意見・要望があった。以下、それらについて簡単に列記する。
・ナミビアでは体育、美術も担当したそうだが、どのような内容か。
・ナミビアの経験はご自身の人生にどう影響したか。
・ナミビアはダイヤモンドの産地と聞いたがどうか。
・ベトナムの看護師による 5S とはどういうことか。
・マーシャル諸島で糖尿病患者が多い理由は何か。
・海外協力隊の選抜試験には何があるか。語学より人間性が大切ではないか。プロの面接官に委ねてはどうか。
・派遣条件の年齢 69 歳以下を見直してはどうか。
・一般案件、シニア案件の区分が分かりにくい。
・中進国の罠と言われるが、今後はシニアやベテランによる支援が重要ではないか。
・NTT は民営化後、採算に乗らない協力隊事業には派遣しなくなったが、ビジネスにつながると説明しやすい。退職者は比較的容易に応募できるが、現役は難しい。
・世銀プログラムはコストパフォーマンスを強く求めているが、JICA はどうか。
・税金に基づく協力隊事業であるが、目的はビジネスにつながるか、ロマンか、外交か。
・社会還元表彰を 10 年以内に限定した理由は何か。
・今回の講演を大学、高校、中学などでも話してはどうか。
・オンラインによる支援を拡大してはどうか。
・大規模開発等に対する教育プランを作成し、各国に浸透・展開してはどうか。

上記のような多数の質問・意見・要望に対する講師の答えは、参加者の特権(楽しみ)として省略するが、一つ一つ丁寧に、かつ笑顔で、時には毅然として対応する講師の姿

を見て、日本の少し明るい未来を見た感じがした。また、終了後、数名の参加者から、「とても楽しかった」「言いたい放題で失礼しました」「講師によろしくお伝えください」などのメール・電話が来たことも当会初めてのことであった。終了予定は 20 時 30 分であったが、21 時過ぎまで絶え間ない意見交換があり、真にウェブサロンの雰囲気であった。



編集後記(編集者から一言)

皆様のご協力をいただき、おかげさまで会報第 109 号を発行することができました。今回は当会の日下顧問(NTT 東日本 国際室長)から「NTT 東日本におけるソフトウェア開発の内製化」の特別寄稿をいただくとともに、岩槻日記、海外グラフィティ、俳柳紀行のご寄稿継続をいただき、誠にありがとうございます。

また、前回から当会会報配信先の皆様によるメッセージリレーを開始いたしましたが、今回 6 名の方からメッセージをいただき、誠にありがとうございます。今後も、「私の海外とのかかわりなど」につきまして別途、五十音順にメッセージのご依頼をいたしますので、ご多忙のこととは存じますが、何卒よろしくお願い申し上げます。

これまでのご協力に改めて心より感謝するとともに、当会及び当会報へのご感想、ご意見などございましたら、下記サイトにご記入いただければ幸いです。皆様からのさらなる会報へのご寄稿と ICT 海外情報ウェブサロンへのご参加をお願いするとともに、今後とも当会へのご指導・ご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

https://ictov.jimdo.com/コメント/

発行： ICT 海外ボランティア会(ICTOV)
会報担当： 空席のため募集中（編集長兼広報部長)、山川　博久(事務局長)
ホームページ担当： 山崎　義行(報道部長)、安達　信男(幹事)